



※精霊棚の一例です

お盆は地方によって豊かな伝統と特色があります。
詳しくは菩提寺のご住職にお尋ね下さい。

【お供え物の基本は五供です】

お盆にはご先祖様が帰ってこられます。
しっかりとおもてなしをしましょう。

- ① 御香おこう
線香の香りと煙で『悟りの世界』へ導きます。良い香りをお供えしましょう。
- ② 明り(灯明)とうみょう
仏様の前を明るく照らします。ご先祖様への想いを明りでお供えします。
- ③ 花(供花)くげ
花咲き乱れる極楽のように花をお供えし、ご先祖様に喜んでもらいましょう。
- ④ 水(浄水)じょうすい
清浄な水で心を洗います。毎日お供えしましょう。
- ⑤ 食べ物(飲食)おんじき
お膳と、その周りに季節の野菜や果物もお供えしましょう。

天台の教えと年中行事

天台宗の教えは『法華経』ほけきょうに基づいています。『法華経』には、全ての生きとし生けるものが仏になれると説かれています。ただし、それを実現することはなかなか困難です。そのために天台大師は『摩訶止観』まかしかんという書物のなかで「心を運ぶ」ことの大切さを述べられました。これは何も厳しい修行のことを言っているのではなく、日常生活において、その一事が全力で出来るよう自分の心を調べ、万事に心をこめて行いなさいということなのです。これが天台の教えの根幹と言えましょう。

日々慌ただしく、また漫然と過ごしがちな私たちですが、昔から先人達が守ってきた様々な年中行事に心を通じ、その一分の功德くどくに預かるよう生活し、それを次世代にも伝えていきたいものです。



天台宗 「シリーズ年中行事」①

お盆のしおり



お盆の由来 ～『盂蘭盆経』のはなし～

お盆は『盂蘭盆経』の故事に由来します。お釈迦様の弟子で神通力に優れた目連尊者は、ある日、餓鬼道に堕ちて飢えと渇きに苦しむ亡き母の姿を見つけますが、いくらその力を使っても母を救うことが出来ませんでした。お釈迦様は「一人の力ではどうにもならない。七世の先祖と父母のために、安居という僧侶達の修行が明ける七月十五日に多くの僧侶に飲食物を施して供養しなさい。そうすればその僧侶達の力によって、苦しみから解放されるであろう。」とおっしゃいました。この教えによって目連尊者は無事に母のみならず七世の先祖までも救うことができたのです。

お盆の過ごし方

お盆にはご先祖様が帰ってくるといわれています。この時期には、七夕や夏祭り、盆踊りなど、様々な行事があります。特にお盆はご先祖様に報恩感謝することはもちろん、餓鬼道で苦しんでいるすべてのものに供養をし、その心をかたちにする大切な期間なのです。

なお、故人が四十九日(満中陰)の忌明けの後、初めて迎えるお盆を初盆・新盆(あらばん・にいぼん)といい、はじめての道に迷わないようにという意味から、新盆提灯や新盆灯籠に明かりを灯してお迎えする習慣が各地にみられます。

地域によってさまざまですが、一般的には、ご先祖様をお迎えするために、精霊棚を三日の朝までにかざります。精霊棚は盆棚ともいい、お位牌を安置し、お供え物をする棚です。ご先祖様が道中で乗るナスやキュウリで作った牛や馬もお供えして、夕方には門口で迎え火を焚いて迎えます(精霊迎え)。また、おもてなしとして菩提寺の僧侶がご自宅を訪問して読経します。これを棚経とか盆経といっています。

精霊棚をかざることが出来なくても、お仏壇を掃除し、お花やお供え物をして、気持ちよくお盆を迎えたいものです。

そして十六日の夕方に送り火を焚き、お盆の間に一緒に過ごしたご先祖様を送り出します(精霊送り)。十六日夜の京都で催される「五山の送り火」は有名ですし、地域によっては川や海まで送る「精霊流し」「灯籠流し」の風習もあります。

このようにお盆は、家族と先祖を思いやり、お迎えからご接待、お見送りまでおもてなしの心にあふれた行事なのです。

私たちはお盆を迎えるにあたり、まずもってご先祖様に感謝するとともに、日頃の生活を反省して自分を見つめ直す機会といたしましょう。

